



開講年度 Academic year	2025年度		
講義コード Course title (Japanese)	021020101		
講義名 Course title (Japanese)	文化人類学 A		
英文講義名 Course title (English)	Anthropology A		
(副題) Course subtitle			
開講責任部署 Faculty			
講義開講時期 Semester(s)	前期	講義区分 Type	講義
単位数 Credit hour(s)	2	時間 Total hours	0.00
代表曜日 Day	月曜日	時限 Period	2 時限
校地 Campus	大行寺キャンパス		

所属名称	ナンバリングコード
	C2-CUA101LJ

担当教員 Lecturer(s)

職種（専任教員・非常勤教員） Position (Full-time/Part-time)	担当教員名 Lecturer(s)	実務経験の有無 Work experience	所属学部 Department
専任教員	◎ 齋藤 正憲		発達科学科心理学専攻

授業の内容（主題） Course description

人間がもっとも知りたいこと。それは人間のことである。そして、自分のことは知っている（あるいは知っているつもりになっている）から、興味は自ずと他者へと向かうはずだ。けれども、そもそも、他者にはなれないのだから、他者を完璧に理解するなんて、どだい、無茶な話である。それでも、人間は人間のことを知りたがる。それだけ、他者を理解することは人間の根源的な欲求ともいえるのである。

人間を、そして他者を知りたくて、さまざまな学問が発達したが、その一つに、言語や社会といった文化的側面に照射する文化人類学がある。融通無碍で複雑怪奇な人間社会に挑む文化人類学は、しなやかで、かつ、誰でもが共感できるアプローチを信条としてきた。本講義では、より具体的な研究実践例の確認に力点を置きつつ、親しみやすい文化人類学をみなさんに提示したいと考えている。

コロナ禍において、他者との距離が広がってしまった今だからこそ、文化人類学を学んでほしいと思う。

到達目標 Course objectives

1. さまざまな人間文化の多様性を知り、国際化する社会に貢献できる力を養う。
2. 文化人類学の基本的な考え方に触れ、複雑な現代社会を理解する力を向上させる。
3. 文化の多様性を掌握することで、他者・異文化と真摯に向き合えるようになる。

ディプロマポリシーとの関連 Accordance with diploma policy

◎：非常に強く関連する
○：強く関連する
△：関連する
空欄：該当しない

①二十一世紀の社会の発展と地域の産業、経済、文化等の活性化に貢献できる能力	◎
②激変する国際社会の中にあつて、十分な異文化理解のもとに、長期的で広い視野に立って将来を展望し、行動できる能力	◎
③本格的な高度情報社会において、最新の情報を的確に入手し、それを有効に活用したうえで効果的に情報を発信できる能力	◎
④自らの判断、努力と責任に基づいて、社会に積極的に貢献できる豊かな教養と柔軟な思考力	◎

授業計画表 Course plan

回 Class sessions	内容 Topics	予習・復習 Expected work outside of class
第1回	導入：古代エジプトjへの招待	ネットで構わないので、文化人類学に関する研究論文を検索し、読んでみてほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第2回	文化人類学とは何か？	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第3回	文化人類学の黎明：ダーウィンとモーガン	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第4回	マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第5回	機能主義①：交又いとこ婚と冗談関係	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第6回	機能主義②：互酬性	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第7回	レヴィ＝ストロース『野生の思考』	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第8回	神話の構造分析	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第9回	構造主義について①	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第10回	構造主義について②	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第11回	中根千枝『社会人類学』	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第12回	佐々木宏幹『宗教人類学』	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第13回	沖縄のユタとツカサ	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第14回	祖父江孝男『県民性：文化人類学的考察』	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。
第15回	山口昌男『文化と両義性』	予習の必要はない。復習として、受講生には講義内容を振り返ってほしい。そのために、4時間の学修を求める。

授業計画コメント Course outline	文化人類学はとても面白い学問だと講義担当者は考えている。そして人間のことを扱うので、個人から社会まで、幅広い領域（おそらくありとあらゆる分野）をカバーしている。そして、その視野は環境、経済、法律、教育にまでも射程に収めてしまう。文化人類学者・レヴィ＝ストロースが世界の思想を牽引し、構造主義の中心に君臨したのは偶然ではなく、必然だったのだ。文化人類学の入門としての本講義を是非、受講してみしてほしい。
授業の進め方 Session plan	本講義は対面形式で行なう。ぜひ、主体的に、授業に参加してほしい。
アクティブラーニング Active learning	最終的にレポートを作成してもらう。講義期間中、レポート作成に関する個別相談は随時、受け付けるつもりである。自ら考えることで、文化人類学をエンジョイしてほしいと強く願っている。
授業時間外の学修（予習・復習等） Preparation and review outside classroom hours	最終的なレポートの作成を念頭におきつつ、適宜、学びを進めてほしい。

教科書等 Textbooks and materials						
	タイトル Title	著者名 Author (s)	出版社 Publisher	出版年 Year of Publication	価格 Price	ISBN
1						
2						
3						
4						
5						
(必ず購入すべきもの) Materials required for sessions		特になし。				
参考図書 Reference book(s)		祖父江孝男 1990 『文化人類学入門』, 中公新書. 綾部恒雄(編) 2006 『文化人類学20の理論』, 弘文堂. そのほか、参考文献を適宜、お示しするので、貪欲に読み進めてほしい。				
成績評価方法および評価基準 Evaluation criteria						
	定期試験 Tests	授業内小試験 In-class quizzes	レポート・課題 Reports/Assignments	受講態度 Class Attitude		
評価比率% Evaluation ratio	0%	0%	80%	20%		
成績評価の方法に関する注意点 Assessment criteria		文化的事象を取り上げつつ、そのことについて、文化人類学的に考察してもらう。 テーマは自由とするが、詳細な書式等については、追って、指示させていただく。				
科目のレベル、前提科目など Level / Prerequisites		特に定めていない。意欲さえあれば、どなたでも、文化人類学の勉強を始めることができる。				



✕ ウィンドウを閉じる